宇宙テラリウム

柔らかな水の中を漂うような眠りから覚めた。布団にくるまっているため、視界は真っ暗だ。ずっと前から、「目を覚ましては眠る」を繰り返す生活が続いている。ベッドから出ず、食事もずいぶん取っていない。もはやただ存在するだけの「物質」だ。

引きこもってどれほどの時間が経っただろう。何をきっかけに引きこもり始めたのか、もう記憶がない。ただ心の一部に大きな穴が開いていることと「消えてしまいたい」という気持ちだけが、自分が外に出ることを拒んでいる。初めは家族がドアをノックしたり怒鳴ったりしていたような気がするが、今はそれも無い。暗い部屋はまるで時間が止まってしまったかのようだ。

「……」

無性に目が冴えてしまった。顔まで覆っている掛け布団をそっと除ける。暗闇に目が慣れると、整頓された自分の部屋が見渡せた。散らかっていたのを、わざわざ片づけてからこもったらしい。変なところで几帳面なのだ。口元を緩めてから、そっと寝返りを打った。ベッドの反対側はすぐ壁で、大きな窓が付いているのだが、今は厚いカーテンに閉ざされている。下の方から幽かに光が漏れていた。太陽のものよりも遠慮がちな様子に、今が夜であると知る。私はもぞもぞと起き上った。久しぶりに体を動かすのであちこちきしむ。

「うー、いてて」

独り言をこぼしながら、カーテンをそっと開いた。たった今までの自分のように眠りについている住宅街とそれを照らす月や星を想像し、訳も無く感傷的な気分になる。しかし、実際に目の前に現れた光景に私は目をしばたいた。少し残っていた眠気が一気に吹き飛ぶ。

幅は私の身長よりも少し長い、青白い球体が山積みになっている。それはこの窓のすぐ下からくだりながら遠くまで続いていて、その先は砂漠のように見えた。空は、小さい頃山にキャンプに行った時に見たような満天の星空。青黒い布に白のビーズを散らばしたようだ。

「綺麗……」

驚いたのは初めだけだった。どうしてこんなことになっているのか、そんな答えの分らないことを考える前に、外に出てみたいと思った。体中がウズウズしている。私は靴を取りに行こうとドアノブを回した。

「っ、開かない!?」

壁にノブが付いているのかと一瞬疑う。ドアはびくともしなかった。体当たりをしたり、殴りつけたり、家族の名前を叫ぼうとしたところでハッとする。今更そんなこと、どうでもいいじゃないか。靴をあきらめ、靴下も履かず、Tシャツ短パンのまま、私は広がる世界に思い切り飛び出した。

球体は岩のような感触で、少し薄荷の香りがした。足の裏がひんやりとして気持ち良い。一つ一つ飛び移って移動する。ずっと運動していなかったはずなのに、息一つ切れないまま私は岩の上をかけて行った。

途中にクレバスのような大きい割れ目があった。覗いてみると、透きとおった池があって、中でカラフルな光がついたり消えたりしながら漂っている。私は居てもたってもいられず、水の中に手を入れた。ゼリーのようなものが手を撫でていく。

「クラゲだ！」

弾んだ声が出る。私は今、笑っている。久しぶりのことだ。子供のようにはしゃぎ、泳ぐクラゲを捕まえようと手を動かす。黄色の光はピンク色や緑色に変化しながらゆらゆらとすり抜けていった。特に綺麗な、紫に光るクラゲを追っていると、岸に置いている手が滑った。体が傾き、水の中に落ちる。美しい色彩の中で、私は酸素を求めてもがいた。いきなり何をしているんだ私は。手を上に伸ばして岸をつかもうとすると、なにかに手首をつかまれ、思い切り引き上げられる。青白の岩の上でせき込む私の背中を、その手は優しくさすった。

「もう、楽しそうだなって思って見てたら急に落ちるんだもん。びっくりしたよ」

どこか懐かしい声。見上げると、快活そうな少女がニコニコしながら私を見ていた。

「あ、ありがとう」

この子は誰だろう。この世界に、私一人だけだと思っていたが、他にも人はいるのだろうか。急に暗い気持ちになる。誰かと関わることに少しの恐怖を抱いていた。

「クラゲが好きなの？」

少女は屈託のない笑顔をうかべている。私は池をちらりと見た。

「好き……というか、このクラゲが綺麗だから好き」

すると彼女はしゃがみこんで水の中に手を入れると、いとも簡単に青紫の光を放つそれを一匹掬いあげた。

「これでしょ」

クラゲは空中を泳ぐようにして私の手の中に納まった。指でつつくと触手を絡めてくる。かわいい。

「あなたのものなの？」

「そう、でもあなたのものでもあるよ。この世界には、私とあなたの二人しかいないから」

少女はそう言ってウインクした。そういった動作の一つ一つがチャーミングだ。

「ねえ、もっと楽しい所に行こう。世界はもっと広がってるんだよ」

手首をつかまれる。拒否しようったって、そうはいかない。この子は人を自分のペースに引き込む力を持っているようだ。私は自然と頷いていた。

丸い岩の上をはねる影が二つ。私は今心から楽しいと思っていた。人と関わりたくないとか、怖いとか、そういうことを忘れさせてくれる少女だ。私達は砂の上に降り立った。私の観察は正しかったようで、岩を過ぎると広大な砂漠が広がっていた。一定間隔を開けて、街灯が立っている。絵本の世界のようだ。サクサクと砂を踏んでいく。遠くの方に風化した船や家が沈んでいるのが見える。

「ねえ、幻想みたいで素敵でしょ」

思わず立ち止まって遠くを眺めている私に、少女が言った。どこか懐かしさを感じさせる風景。急に言葉にできない感情がこみあげて、泡になった。

「ええっと、たしかこのへんに」

自室に戻った私はクローゼットの中をごそごそと探っていた。金魚鉢があるはずなのだ。クラゲは空気中でも生きていられるらしいが、そこは気分で。

バサッ　カランッ

見ると、何か青い冊子と色え――――

「っ……！」

私は乱暴にそれをクローゼットの中に戻した。心を鈍器で殴られたかのような痛みが襲う。

しばらくうずくまり、気持ちが落ち着くのを待ってから鉢を引き出した。水は入れずにクラゲをその中にふわりと置くと、ランプのようにぼんやりとした光が部屋を照らす。

その日から毎日、少女と世界を飛び回った。永続的な夜の世界。どこまでも広がる幻想世界。私達はいつしかこの世界を「宇宙テラリウム」と呼んだ。

光の泡を追い、海にたどり着く。月の光が道を作っていた。

「この道を最後まで行ってしまったら、空に落ちるから注意して」

「空に、落ちる？」

「うん。重力が反転してるから。おもしろいよ」

彼女はそう言うと、光の道を歩いていく。私もあわてて後を追った。絨毯の上を歩いているように柔らかい。しばらく行くと、少女は立ち止った。

「ほら、あそこ」

少し先が、滝になっているようだった。そうして落ちた水が玉となり空に上がっていく。月の光が反射してダイヤモンドダストのようにきらきらと輝いていた。時たま根から引っこ抜かれたような大樹や家が逆さまになって上昇していったりもして、私達の目を楽しませた。

「空想みたいな世界だよね」

少女がしみじみと呟く。私は、あの心の痛みがそっと顔を出すのを感じた。

「そうだね。私はこんな素敵なこと想像できないけど」

そんなセンスなんてない。何かを思い出してしまいそうで、私は慌てて首を振った。そんな私を、少女が不思議そうに見つめている。夜空を閉じ込めたような瞳で見つめている。

この世界にやってきてどれほどの時間が経ったか。時たま無性に辛くなる時もあるが、私はここがすっかり気に入っていた。ある時少女は、岩の上に座って言った。

「今日は、私が住んでいる所に行こう」

私は今まで彼女の家のことを聞いたことがなかった。そういう情報を彼女が明かしたことは今まで無かったことだ。私は素直に嬉しく思い、その提案に賛成した。

少女の家は灯台だった。月の道がある海沿いに歩いて行くと、天

まで届くほどの白い塔がぽつんと立っている。明かりは灯されていない。もっとも、星と月の光が海を明るく照らし出しているため、灯台を使う必要は無いように思われた。赤い小さな扉から中に入ると、目の前に石造りの螺旋階段が現れた。どうやら一番上に一つだけ部屋があり、そこまでは全て階段らしい。

「どんどん登っちゃって！」

私の絶望的な表情が可笑しかったのか、少女は笑いながら言った。見上げると天井は果てしなく遠い。私は覚悟を決め、一段目に足をかけた。

「あなたはこんなところにずっと住んでいたの？」

「そう。でも寂しくなんてなかった。ここは誰にも邪魔されずに好きなことができる場所だから。それに、毎日あなたに会えたから」

『誰にも邪魔されず』……。「宇宙テラリウム」の中は私達二人きりだ。この子に邪魔だと思われた瞬間、私の居場所は小さい自室のみになるだろう。それを考えると気持ちが暗くなる。階段はまだ続いている。

突然、壁が黄色くなった。驚いて見ると、ぎっしりとレモンが描かれている。葉も描かれているから認識できるが、ほぼ黄色で塗り潰されている。子供が無心にクレヨンを動かした後のようだ。

「なにこれ～」

おどけて壁に指を這わせていると、少女は真面目な顔で

「レモンが好きなの。どれだけ描いていても飽きないわ。そういうものって、あるでしょ？」

「……そうだね」

この子は絵を描くのが好き。今日初めて知ったことだ。そして、私は今、この階段を最上階まで登ることが怖くなっている。きっとそこには彼女の「好き」が全て詰まった絵があるのだろう。

突然、はっきりとしない、それでいて強烈な映像がフラッシュバックした。ノートを持った制服姿の女の子たち。中を見て甲高い声で笑う。こんなもん描いてるの。何これ、下手くそ。ねー！

舞い散る紙の切れ端。そして……

「ねえ、止まってるよー？　大丈夫？」

ハッとした。冷や汗が出ている。私は大丈夫、と笑みを作り再び足を進めた。階段は終わりに近づき、黄色の扉が見えてきた。

「ここだよ。ま、入って入って！」

少女は勢いよく扉を開けると先に中に入った。後ろから恐る恐る続くと、その部屋は意外なほど物が少なかった。大きな窓とベッド、いくつかクローゼットがある。そして、金魚鉢の中に光るクラゲ。床の上に何かが置いてあった。ボロボロの、青い表紙のスケッチブック。表紙には、汚い字で私の名前。

「なんで……ここに」

見たくない、その意思に反して手はそれを拾い上げる。震える手で開いてまず目に飛び込んできたのは、水色でぐるぐると塗りつぶされた丸がたくさん。その周りは濃い青色で雑に塗られている。

次のページには赤、青、黄、緑、さまざまな色で描かれたクラゲ。記憶がどんどん蘇る。このスケッチブックは、幼い頃に与えられた

ものだ。小さい私は毎日毎日、色鉛筆を握って溢れる空想をこの紙に残していった

無心にページを繰っていくと、最後に一枚だけ白く残ったページが現れる。私は知らないうちにペンを握っていた。白に弱弱しい黒い線が引かれる。

「っ……」

失敗した、そう思った。所詮私はこんなことしか……。センスなんてない。あの頃からなんでこうなってしまったんだろう。私は、描いてはいけない。心に釘が刺さった。涙が黒の上に落ちて、にじみを作る。隣に少女がしゃがみ込んだ。

「いいよ、そのまま続けて」

彼女の手がペンを持つ手に優しく添えられた。その瞬間、白い光があふれる。ペンが、色鉛筆や筆やタッチペンに変わり、紙は画用紙やケント紙、タブレットなどにくるくると変わっていく。引いた線は月のような光を帯び、私達のいる灯台と海、月を現した。

「この世界にあるもの全部、あなたがかつて描いたものだよね。なんて綺麗だって思わなかった？」

「私」が優しくささやいた。私は嗚咽を漏らしながら何度も頷いた。

○

私は昔から絵を描くのが大好きだった。家族も友達も先生も、皆私の絵を褒めてくれた。絵描きになるのだと、その頃から真剣に考えていた。

しかし、小学校高学年あたりから、だんだん周りの見方が変わってきた。休み時間に絵を描いていると、男子も女子もからかっていった。自由帳をひったくられ、クラスで回されたこともある。絵の好きなクラスの人気者は、皆の笑いの的になった。絵がいけないことのように思うようになり、隠れて描くようになった。

中学に入ると、親も絵を描くという趣味に眉をひそめるようになった。「絵なんか描いてないで、勉強しなさい」何度言われたか。将来は画家になりたいと言った時は一蹴された。理解者なんていない。それでも描くんだと、意地で続けていたら、今度は自分よりもっと上手い人の存在を知っていった。自信喪失。そこで一気に切れた。

私は、こもることにした。自分は認められないんだと思い、もう誰とも関わりたくなかった。絵も、次第に描かなくなっていった。自分を覆う殻がどんどん大きくなり、ついに「宇宙テラリウム」が出来上がったんだ。

○

「これ、もっていきなよ」

階段を降りようとした私に、少女はスケッチブックを差し出した。

「もう大丈夫だね」

私は笑うと、少女に手を振った。そして果てしなく長い階段を駆け下り、自分の部屋向かって全速力で走った。風を感じる。

窓から、勢いよく部屋の中に入った。真っ暗な自分の部屋。金魚鉢からクラゲが消えていた。私は後ろに広がる素敵な世界を振り返

る。そして、カーテンを閉めた。もう、私は過去を見ることは無いだろう。あの子に会うことも無い。ドアの隙間から、かすかに光が漏れている。私はドアノブに手をかけた。カチャリ、と軽い音がする。

たとえ光の中に黒が滲んでいても、これからは、自信を持って絵を描き続けられる。そう信じている。私は固い決意を持ってドアを開けた。